

暁烏敏による浄土真宗と神道の接合

Haya Akegarasu's Linking of Jodo Shinshu and Shinto

田 近 唯

Yui TAJIKA

(日本女子大学大学院人間社会研究科相関文化論専攻博士課程前期二〇二一年度修了)

要 約

浄土真宗の仏教者である暁烏敏(あけからしはや)(一八七七―一九五四)は、昭和初期における真宗大谷派を代表する人物のひとりであり、一九一〇年代半ばから行った各地での講演活動で多くの信者を獲得したが、天皇を中心とした国体を信奉し、その排外主義的な思想によって当時の日本人を宗教の側面から戦争へと駆り立てた「日本主義者」であると評されることも多い人物である。本論考では、特に一九三一―一九三五年頃までにおける暁烏の講演のいくつかを検討することで、その思想の内実を読み解くことを目指した。

暁烏は、親鸞・聖徳太子・本居宣長の三人の人物に注目しており、彼らを関係づけながら接続させて考えることなどを通して、浄土真宗と国家神道を接続させた思想を展開している。本論では、なかでも、暁烏による十七条憲法理解に注目し、十七条憲法第一条・第二条を中心に暁烏の思想を読み解いている。

そして、暁烏の言葉を読み解くと、彼の思想は、一概に「日本主義的」であったと言い切ることはできず、そこには、彼なりの宗教観とそれに基づく理論があることがわかる。

[Abstract]

Haya Akegarasu (1877–1954), a Jodo Shinshu Buddhist, was a leading figure in the Otani sect of Shinshu during the early Showa period and had many followers. He is considered a Japanese who led the Japanese to war through using religion. Here, I examine his thinking in his lectures, especially from 1931 to 1935.

Akegarasu used the figures of Shintō, Prince Shotoku, and Norinaga Motoori to develop connections between Jodo Shinshu and state Shintō. This paper focuses on Akegarasu's understanding of the 17 Articles of the Constitution and interprets his thought in terms of Articles 1 and 2.

Akegarasu's work makes it clear that his thinking was not Japanese in general; rather, he had systematized views of religion.

はじめに

昭和前期といえ、一九四一年に治安維持法が改正され、万世一系の天皇が君臨し統治権を総攬するという国体観に反する思想・運動は取り締まりの対象となり、日本が国家主義と戦争の時代へと向かっていった時代である。

そのような中、国内の宗教団体も変革を余儀なくされ、それぞれが天皇主義的「伝統」や国家主義との関わりを検討せざるを得なくなっていた。中でも、仏教界は総じて、自ら進んで戦争協力へと向かっていったとされており、特に浄土真宗では、天皇を阿弥陀仏と同一視するような戦時教学が行われ、積極的に国家と一体化していったといわれている¹。

その、浄土真宗大谷派の戦時教学における責任者としてしばしば名前が挙げられるのが、本論考で扱う暁烏敏である。

暁烏は、一八七七年、石川県金沢市の真宗大谷派・明達寺の息子とし

て生まれた。一八九三年に京都大谷尋常中学校の三年生に編入学し、その頃そこで教鞭をとっていた、浄土真宗の近代化に尽力した人物として著名な清沢満之^{きよざわみちし}と出会い、彼から大きな影響を受ける。

一九二六年から二七年にかけては、インド仏跡を参拝、ヨーロッパ各地を旅行し、その中で日本人としての自覚を強く持つようになり、その後日本精神に関する研究に注力するようになった。

これまでの暁烏に関する研究は、暁烏の発言・活動が宗門・社会に与えた影響に注目し、暁烏の日本主義的傾向の研究、ひいては、真宗大谷派の戦時教学に対する暁烏の責任を問うものがほとんどであった²。

また、その思想内容についての研究は、その師である清沢満之研究に付随するものや、その『歎異抄』理解に関するものがほとんどであり、教団への影響力を持ち始めたと考えられる昭和前期の彼の思想内容に関する研究は、この時期の暁烏の著作・講演録のほとんどが『暁烏敏全集』⁴から除かれていることも相まって、現状では不十分であると言わざるを得ない⁵。

本論考では、一般的には、天皇を中心とした国体を信奉し、その排外主義的な思想によって当時の日本人を宗教の側面から戦争へと駆り立てた、いわゆる「日本主義者」であったとまとめられがちである暁烏のその思想の内実を、一九三一年四月の講演録である『聖徳太子奉讃』、同年一〇月の講演録『日本仏教の特質』、一九三五年四月の講演録『神道と仏道』の三つの文章から明らかにすることを目的とする。

暁烏が宗門内で、特に一般信徒に対して影響力を持ったことから考えると、彼の語りには力があつたと考えられる。彼が実際に一般の信徒に語った言葉を講演録から分析することで、彼は天皇主義的イデオロギーに基づいて人々を戦争へと駆り立てた扇動家だったのではなく、彼なり

の体系的な宗教観を持っていたことが見えてくるであろう。

また、暁烏の膨大な講演録の中でも、特に今回扱う三つの講演では、彼の特殊な国家観や宗教観が具体的に語られており、また、これらの講演が行われた当時は、世界恐慌が起き、満州事変、国際連盟脱退と、日本が戦争へと動き出している時期である。この時期の暁烏の思想を検討することは、「日本主義的」と言われた暁烏の思想の実態を理解する大きな助けとなるであろう。

一、親鸞・聖徳太子・本居宣長

先述したように、暁烏がその講演の中で頻繁に取り上げるのは、親鸞・聖徳太子・本居宣長の三人である。彼らはそれぞれ異なる時代に活躍し、その活動内容も多様であるが、暁烏にとっては重要な関連性をもつて捉えられている。

(一) 本居宣長と親鸞

海外周遊をきっかけに日本精神への関心を深めた暁烏は、「日本の古代を出来るだけ深く研究しようと思ひ」たち『聖徳太子奉讃』(以下『奉讃』)一頁)、本居宣長『古事記伝』を三か月ほどかけて読み込んだ。

宣長は江戸中期に活躍した国学の大成者であり、『古事記』や『日本書紀』などの古典に基づいて古代日本の思想を研究した人物で、『古事記』の注釈書である『古事記伝』では、儒教に代表される「漢心」を排し、日本古来の精神である「真心」に返るべきことが主張されている。

暁烏は、「宣長の家は代々浄土宗であつて、先祖には熱心な信者が多く出てをられます。……宣長の霊は今県社になつて祭られてあるが、その霊は浄土宗の念仏の道によつて育てられた方であるといふことがわか

るのであります」(『奉讃』四頁)と、宣長がその育った環境のために浄土宗の影響を受けていたことに注目し、「本居宣長が『古事記』を読まれた態度とその上に開かれた心の世界とが、親鸞聖人が『仏説無量寿経』をお読みになつた態度、又その上に開かれた心の世界と殆ど同一であるやうな感が致しました」(『奉讃』二頁)と、宣長が『古事記』から読み取った日本固有の神代の精神と、親鸞の仏教への信仰が「殆ど同一」であるとしている。

また、暁烏は、それだけでなく、「日本の神代の精神が親鸞聖人の御信心の底にも流れてをる」(『奉讃』三頁)と、親鸞の思想そのものが元より日本の神々の精神に通じているという。

親鸞に関して、暁烏は、「聖人が藤原家の流である」(『奉讃』六頁)、つまり藤原家の子孫であると理解している。そして、「藤原家のもとと中臣家であり」、「中臣家は天兒屋根命あめのこやねのみことの裔すえで神代から神様を祭る家柄」であつたことから、その子孫である親鸞は、「神主さんの子孫である」という。そこから、「聖人の血にはこの神を祭る心の血が流れてをるに違ひない」と、親鸞は日本固有の神々を尊崇する精神の持ち主であると考へている(『奉讃』六・七頁)。

そして、親鸞の『現世利益和讃』の「天神地祇てんじんちぎはことごとく／善鬼神ぜんきじんとなづけたり／これらの善神ぜんしんみなともに／念仏の人をまもるなり」という文言に、「聖人の御信心の上に日本の神々のおすがたを拝する」(『奉讃』一〇・一一頁)という。「天神地祇」とは、一般的にはすべての神々を指し、仏教者がこの言葉を使う際には、梵天・帝釈天やその他の鬼神など、仏教的文脈において神と呼ばれるものを想定していると考えるのが一般的であるが、暁烏はこれが日本固有の神々を指しているとしていると捉え、そこから、親鸞の仏教の信仰には、日本の神々を尊重す

る心があつたと言う。

さらに暁烏は、「本居宣長によつて私が研究し得た日本精神は、親鸞聖人によつて久しく教へられてきた信心と全く一つのものである」(『奉讃』九頁)と、宣長が示した『古事記』の神々の精神と、日本の神々と尊重した親鸞による仏教とを重ね、仏教と神道を同時に信仰することの正当性を論理づけるのである。

(二) 親鸞と聖徳太子

親鸞は聖徳太子が建立したと言われる六角堂に参籠し、そこで太子の示現に導かれて法然に帰依し、『皇太子聖徳奉讃』等の和讃を多数残している。

親鸞の太子信仰について、暁烏は、日本仏教の発展において重要な役割を果たしたことなどから、「日本の仏教を仰いでをる者は、どの宗派の者でも聖徳太子に報恩の心を運んでをらんものはない」とし、「しかし、その中でも親鸞聖人は、熱い燃えるやうな情熱をもつて聖徳太子を仰いでをられる」と、卓越した情熱を持っていたと考へている。(『奉讃』一三・一四頁)

そして、暁烏は、「親鸞聖人の御信心が、日本精神の中心を把握せられてをるといふことには、聖徳太子のお骨折りと御信心とがその源流をなしてをる」(『奉讃』一四・一五頁)と、親鸞に、先にも見たやうな日本固有の神々を尊重するやうな心があるのは、このような太子への篤い信仰があつたからでもあるとしている。

このような考えもあり、暁烏は太子に対して関心を持った。しかし、当時、太子による『法華経』『維摩経』『勝鬘経』の注釈書である三経義疏を未だ通読していなかった彼は、「聖徳太子のこれらの三経の御注釈

に現はされたお心持の結晶とも申すべき『十七条憲法』を味ふことによつて、太子の御心を味ふということも大切」（『奉賛』一五頁）と、十七条憲法を中心に、太子理解を進めている。

二、暁烏の聖徳太子理解

（一）太子と日本宗教の関わり

聖徳太子は、一般的には、十七条憲法や冠位十二階の制度を制定し、遣隋使の派遣を行ったことや、仏教興隆に尽力したことで知られている。

一方で、暁烏は、親鸞が太子を『正像末和讃』において「和国の教主聖徳皇」と仰がれていたことに注目し、そこから、「聖徳太子以前には教といふものが形作られてをらなかつた」、「日本に始めて宗教を教へられたのは聖徳太子です」と、太子は日本において初めて体系的な「宗教」を確立させた人物であると考え、「和国の教主聖徳皇」という言葉と重ねて、「だから聖徳太子は日本の教主です」と、太子を日本の宗教における始祖にあたる存在であるとしている（『奉賛』二八―二九頁）。

暁烏は、「太子は仏教に対して深い造詣を持つ」と考えており、『法華経』の中の、無量寿・無量光を具へさせられた本門の釈迦を味はせられた。すべてを摂取し、すべてを救はれる偉大な魂のもとに、しかも、謙虚な心で、一切を礼拝するといふ生活を教へられる、その教を静かにお味ひになつた」（『日本仏教の特質』（以下、『特質』）一三二頁）と述べ、このような仏教の精神によつて、当時、そのわがままで横暴なふるまいに太子を悩ませていた蘇我馬子を、「太子を拝むまでに、心が謙るやうにお育てに」なつた。

このように、『法華経』の教えによつて心を救われた太子は、「法華

経」の上に、太子御自身、日本の天照大神の尊い御心を味はせられた」（『特質』一三二頁）と、『法華経』、つまり、仏教への深い理解を通して、日本の神である天照大神の「どこまでも平和な明るい」（『奉賛』五六頁）心を感じた。つまり、日本固有の精神をも体得したとしている。このように、太子は「日本精神の根本を、仏教の教によつて証られた」（『特質』一三二頁）と、仏教への深い理解を通して、仏教に救われた経験から、日本精神についての理解を深めたと、暁烏は考えているのである。

また、「日本の国の仏教の主といふのではない。この教は仏教のみを言ふのではなく、広い意味の教です」と、太子が確立した宗教とは、仏教のみに限らない、広い意味での日本の宗教であると、暁烏は太子を高く評価している（『奉賛』二八―二九頁）。

暁烏の考える、太子が興した「広い意味の教え」は、主に日本精神や日本宗教に関する教えをあらわしたことで、政治・宗教を通して日本人に仏教を広めたことの二つに分けることができる。以下、それらを見ていく。

（二）十七条憲法の目的

暁烏は、「太子は自己を証られた天津日嗣の末裔でおはします。聖徳太子が御自分の裡に、その神の御心をはつきり自覚され、その神の御心を国民に知らせられたといふところに「和国の教主」と申される所以がある」（『奉賛』二九頁）と述べ、天皇家の末裔である太子が、自身の内に神の御心を自覚し、それを国民に伝えたとし、さらに、「私は聖徳太子が深い内省によつて、我が祖先の霊を味うて、「和を以て貴と為す。」と、日本国民の中心の宗教を現はされたのだと思ひます」（『奉賛』六六―六七頁）と述べる。

つまり、暁烏は、太子自身が日本精神・宗教といったものを創設した

と考えているわけではなく、太子が「深い内省」によって、太子の祖先、つまり、天皇家の精神を体得し、形として表したという意味で、太子を「日本の教主」と言っているのである。そして太子は、自身が体得した「日本精神」をひとびとに正しく伝えるために、「日本精神の基礎として、『十七条憲法』をお定めに」（『特質』五四～五五頁）になったと言う。

十七条憲法は、一般的には、大和朝廷の官僚の守るべき道徳的訓戒が定められたものとされ、儒教や法家思想の影響が強いといわれている。一方、暁鳥はこれを「聖徳太子の憲法は主として人間の中心を教へられたもの」と言い、「人間に最も大切なものは何か。それは心の据^{すわり}を得るといふことです。……太子はそれを教へられたのです」（『奉讃』四五頁）、つまり「人間の中心」や「心の据」を得ることを教えたものであるという。しかし、どうすれば、「人間の中心」や「心の据」を得ることができるのであるのか。

暁鳥は、「宗^{むね}とするところ、崇めるところ、心の落着くところを教へるから宗教です」（『奉讃』五一頁）、「その生活の中心の据とするとところを教へ、宗^{むね}とするところを教へるのが宗教である」（『奉讃』五二頁）、「私共の宗教は、一つに通うた中心を見出すのです」（『奉讃』九九頁）と、人間の心の中心とするとところを教へ、それを見出すことが宗教の本旨であると考えている。つまり、太子は十七条憲法を通して、日本人に「宗教」を教えたと考えているのである。

（三）太子による仏教の受容

暁鳥は、「公に、国家の政治の基礎とし、教育の基礎としての仏教として、朝廷にお採入れになったのは、……聖徳太子の御摂政の時」（『特質』九〇頁）であると、太子が教育・政治を通して日本人に仏教を広め

たとされていることに注目していた。では、太子が日本人に伝えた仏教の思想とはどのようなものであったか。

暁鳥は、「聖徳太子が日本に始められた仏教は、印度の仏教ではなかった。日本仏教である」（『特質』一六〇頁）と、日本独自のものであると考えており、その根拠として、太子が『維摩経』の義疏を作ったことに注目している。

『維摩経』は、「在家の弟子維摩居士が、たくさんのお家の弟子の未だ証^{まこと}らん点を証^{まこと}つてをられた」（『特質』一〇〇頁）ということにポイントがある経であり、暁鳥はこのことに着目して、「太子はこれのお経の中に、御自分のお進みになる道、ひいては日本国民のゆくべき道を御発見になつた」（『特質』一〇一頁）、そして、「聖徳太子の始められた仏教は、出家の仏教でなしに、在家の仏教であつた」（『特質』一〇一頁）と、太子によって教えられた日本の仏教は、出家をしない、在家の仏教であるという特徴があるとしている。

加えて、暁鳥は、太子の仏教は、「現実的であります。現世的」（『特質』一六〇頁）であり、「死んでなお浄土へ往く仏教でなかつた。……現在のためのものである」（『特質』一〇一頁）と、死後に浄土で救われるというものではなく、今現在、現世で救われることを目的として現世利益のなものであるとしている。

また、暁鳥は、「太子の仏教の御研究は、御自分の救にあつた。それと共に、国民思想を改めたいといふ思召もあつた。それで教育の中心、政治の根本として……『十七条憲法』の上で広く国民に仏教に依ることをお勧めになつたのである」（『特質』一二九頁）と太子の仏教研究の目的は二つあり、一つは自分自身の救い、もう一つが国民思想の改革であるという。

(一) で見たように、暁烏は、馬子の横暴に悩まされていた太子は、『法華経』に帰依することによって救われたと考えている。これにより、太子は、日本精神についての理解を深めたという。加えて、太子は、『法華経』に救われたことで、「現に御自分の悶のうちに救を得て」(『特質』一二〇頁) おり、そのような自身の経験があったからこそ、国民に仏教への帰依を説いたという。

そして、「人間の助かる道は自覚による外にない、自覚だ。……といふことを、太子自ら実験せられて教へられたのであります」(『特質』一五九―一六〇頁) と、自身の実際の経験に基づいて、太子は国民に仏教を広めたと言う。

(四) 宗教である教育

暁烏は、「本当の教育は宗でなければならぬ。宗を教へなければならぬです。人間の立つてゆく中心を教へることが、教育の基礎なのであります」(『特質』一七二―一七三頁) と、教育の基礎とは、人間の中心となるものである「宗」を教えるものであるとしている。

暁烏は、当時の教育は、机上での学びが重視されるあまり、「宗」という人間の中心を教えることが疎かになっていると問題視しており、そのままでは「その人自らの破滅を来し、人類を損ふ」(『特質』一七三―一七四頁) という。

暁烏は、そもそも、「教育は人間を助け、人類を高めるためのものではないか」、「教育は救です。救の道を教へるのが教育です」と言い、さらに、「教育の外に宗教といふものがあるはずがない」、「仏教だつて、キリスト教だつて、やはり教育なんです。救の道なんです」と、救いの道を教えているという点で、仏教やキリスト教といったあらゆる宗教

は、教育であると言う(『特質』一七四頁)。

このように、人間を幸福にする、救いの道を教えるために教育するというのは、(一)(二) でみた、太子自身が仏教によって救われたという実際の経験をもとに、日本人に仏教を教え、それを十七条憲法を通して行ったという、太子の姿とも重なってくる。

そして、十七条憲法第二条の「人はなほだ悪しきもの少し。能く教ふるをもて順ひぬ」という文言を、「いくら人に忤うて軌道を逸するやうな者でも、それをよく教へたら素直になる。忤はんやうになるものだ」と訳し、「ここに教育の大切なことと教育の可能性とが、実験的な強い信念で教へられた」と、教育の大切さが太子の実際の経験に基づいた実感として表れているとしている(『特質』一五一頁)。

このように、暁烏は、太子の実験と十七条憲法をもとに、宗教(仏教)を教育の根幹に位置付けているのである。

三、十七条憲法第一条「和」

暁烏は、十七条憲法第一条を、「これが太子の宗教」(『奉讀』四七頁) と、太子が日本で興した宗教の要点が凝縮されているものと考え、このように書き下している。

一に曰く。和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。人皆党有り、亦達者少し。是を以て或は君・父に順はず、乍、隣・里に違ふ。然れども上和ぎ下睦びて、事を論はんに諧ひぬるときには、即ち事理自に通る、何事か成らざらん。(『奉讀』四六―四七頁)

(一)「和」の魂としての「大和魂」

暁烏は、特に第一条の一文目「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す」という文言の「和」を、「日本精神の中心が、この和であります」(『特質』六七頁)と述べ、「上に柔順に、下に柔順にしてゆくこと」(『奉讃』五六頁)であり、身分・立場の上下にかかわらず、互いに逆らわずに接しあうことであると説明する。

このような「和」にとつて重要なのが、皇室の祖先神であり、同時に太陽神である天照大神の存在である。暁烏は、天照は「どこまでも平和で明るい神様」で、「和といふことに全身を打込んでをられる」、「和」を体現した存在であるという。(『奉讃』五六頁)

また、暁烏は、「和いでゆくためにすべてを捨ててゆくといふのが日本人の信念」(『奉讃』五七頁)であるという。この、「すべてを捨ててゆく」とは、宗教的な信仰・帰依であり、日本人の宗教の中心には「和」の精神があると、暁烏は考えている。そして、「聖徳太子が、和を貴べとおつしやつたのは、天照大神の霊を尊めとおつしやつたことであると思ひます」(『特質』六七頁)といい、太子は、十七条憲法第一条で、「和」の精神を通じて、天照への信仰を国民に向けて説いているとしている。

さらに暁烏は「和魂」という言葉も使うが、『日本書紀』には天照大神の御精神を和魂だといふ言葉で記してあります(『神道と仏道』(以下『神道』)二二頁)と述べ、さらに「和魂とは、和魂、和の魂と書きます」(『特質』六七頁)としており、これも天照の「和」の精神を表していると考えられる。

また、暁烏は、「周囲に忤ふことなく、素直な心をもつてゆく。それ

を願として生きる。天照大神の精神はそこにある。大和魂とはそれだ」(『奉讃』六〇頁)と、「天照大神の精神」を「周囲に忤ふことなく、素直な心をもつてゆく」ような「和」を願いとした「和魂」であり、「大和魂」ともいう。「大和魂」とは、一般的には日本民族固有の精神を表す言葉として、そして近代以降はナショナリズムのなかで頻繁に使われた言葉であるが、暁烏はこれを「和」の魂であると理解しているのである。そして、「日本国は大和の国です、大いに和ぐ国であります」(『奉讃』六一頁)と、国名からも日本の根幹には「和」があるとしており、そこからも、「大和魂」の中に「和」を見る姿勢がうかがえる。

また、暁烏は、「聖徳太子の『十七条憲法』は、大和魂を教へられたのです」と、太子は十七条憲法を通して「大和魂」を国民に教えたといひ、そして「日本の宗教は大和魂です。大和魂といふことがはつきりわかればよいのです。それを自覚するのです」(『特質』六八頁)と述べる。つまり暁烏にとつての日本の宗教の中心にあるのは、この大和魂なのである。

このように日本の宗教の根本は「大和魂」とあるという考えから、暁烏は、「仏教の教を聞かうが、キリスト教の教を聞かうが、日本人としての我々は、大和魂といふものをはつきり自覚するのです。それが日本の宗教です」(『特質』六八頁)と、日本人にとつては、どのような宗教の教えを受けていたとしても、それが「大和魂」の自覚となるのである。日本人の信仰はすべて「大和魂」においてつながっていくと考えているのである。そして、「この精神が、『華嚴経』或は『法華経』或は『無量寿経』その他大乘仏教の精神と一つに通うてをるのであります。これが日本仏教の特色である」(『特質』六八頁)と、日本仏教からの視点で見ると、「大和魂」は、大乘仏教の教えにも通じているということ

にもなるという。

ここから、日本においては、「大和魂」を通じてあらゆる宗教が繋がっているとすると暁烏の論理が見えるのである。

(二) 教育勅語とのかかわり

教育勅語は、一八九〇年に明治天皇の名で発布された、家族国家観に基づいた国民道徳の基本や教育の基本理念である。しかしこれについても暁烏は、「明治天皇が教育勅語を御発布になったときに、宗とすることを教へられました。……仏教が宗教であるやうにキリスト教が宗教であるやうに、教育勅語は宗教であります」(『特質』六〇頁)と、その宗教性を述べている。

そして、暁烏は、教育勅語の「億兆心を一にして」という文言について、「一の心を信じ、広い心を持つて一つの道に進んでゆくこと、それが神の心であります。それは素直な心です」(『奉讃』八九頁)という。この「神の心」とは、天照の御心である「和魂」と通じるものと考えられるが、それが「素直な心」と言われるのは、宣長が「漢心」と対比させて日本民族の精神とした「真心」の影響と見るべきであろう。

暁烏は、日本人にはそのような「素直な心」があるとし、「自分のすることが天意に叛き、万民にそぐはぬといふことをしない。少しでも天意に叛くやうなことをしようと思ふときには、非常な疲労を感じます」(『奉讃』八九頁)と、本来の日本人は大いなるものに反するような行動はしないものであるという。

そして、日本国民と天皇の関係を、「君は天皇陛下御一人、それに対して臣といふのは日本の国民全体です。ぢやから、形の上では天皇陛下が万民の君でましますが、その天皇陛下は万民の心の権化であります。

ぢやから、君臣一体です」(『奉讃』九〇頁)と述べる。

天皇を君、国民を臣民とする考えは明治憲法発布から戦中までの一般的な理解でもあったが、暁烏はそれを、「天皇陛下は万民の心の権化」つまり臣(国民)の心が形をとったものが天皇という存在であると独自に発展させ、以下のように述べている。

一の世界から天皇が現はれ、多の世界に国民がある。そして日本では一の天皇の内容に、多の国民が納まり、多の国民の内容に、一の天皇が住ませられているのであります。それが日本の国体であります。天皇陛下は、万民の心を心とし給ひ、国民は天皇陛下の御心を我が心にお宿し申してゐる。(『特質』七頁)

暁烏は、天皇(君)である「一」の中には、国民(臣)である「多」があり、同時に、「多」の国民の中には「一」の天皇がいるという。天皇の心には国民の心が映し出されており、同時に国民の心には天皇の心が映し出され、「君臣一体」となっているというのである。

暁烏は、「現代の個人主義は、この一個人の権利のみを主張して、大切な君といふ一心を枉げる傾になつてをります」(『奉讃』九二頁)と、明治以降の個人主義は、個人の権利の主張にばかり心を傾けるせい「二」に反していると、個人主義批判も展開しているが、彼の「君臣一体」説は、これともつながってくるであろう。

暁烏のこのような考えは、一見すると全体主義的なものであり、真宗大谷派の戦争協力を推し進めたという一般的な暁烏の印象に合致するものともいえる。しかし、暁烏の「君臣一体」という考えは、ともすると、天皇を一般国民と同次元にみなすことにもつながり、天皇が神聖不

可侵とされた明治憲法に反する考えであるともいえる。このような点からも、暁烏を一概に「日本主義的」といわれる思想をもとに戦争へ人々を駆り立てた活動家であると評価できないことがわかるだろう。

(三) 日本精神の受容性

暁烏は、神武天皇が橿原の都で即位し、日本の初代天皇となった際の勅語である、『日本書紀』の建国の詔の一部に注目し、これを「義必ず時に随ふ」と書き下している。そしてこの言葉から、条理は「変幻自在である」と考え、「日本精神はさう固定したものではないのです。その時代その時代いろいろのものを取容れてゆく」(『神道』三六頁)と、日本精神は柔軟な性質をもったものであると考えている。

そしてそれは、日本の政治のあり方にもあらわれているという。暁烏は、日本は「天皇御自身の御意見のみで国をお治めあそばすのかといふに、さうでない」(『神道』二三頁)と、天皇の新政による独裁を否定し、その根拠に、「日本の天皇陛下が御勅語をお下しになりますまでその順序を承りますと、お勅語をお下しになる前にいろいろたくさんの方にお諮りになり、練りに練った上で初めて御裁可になるものと承ります。ですからその御代御代のご詔勅といふものは、その時代時代の中心の思想が盛られてあるもの」(『神道』二四頁)であると考えている。つまり、日本の天皇は、国民に言葉を発するまでに、周囲から多くの助言を受け、相談を繰り返したうえで初めて言葉を発しており、独断で決定しているものではないのであるから、そこには、いわば、その時代の思想が反映されているとしている。

また、暁烏は、「上和ぎ下睦びて事を論ふ」といふのは、相談するのです」(『神道』二四頁)と、そのような過程は、十七条憲法第一条の

「上和ぎ下睦びて事を論ふ」にも通じており、上の者と下の者が互に素直な心を持って意見を交わし合い、論じ合って決定する精神が現れていると考えている。

そのような日本の精神は、「論じ合ふといふこと……これが議会政治の大事なところであります」と、議会政治という形にも表れていると考えている(『神道』三三頁)。暁烏は、五・一五事件をきっかけに政党内閣の時代が終わりを迎え、議会政治に対し否定的になっている人々が出てきていることを問題視し、「さういふ人達は今日のドイツのナチス或はイタリーのファッショの独裁政治をゆめみているやうであります」と言う。そして、「これは日本の国体とは合はるのであります。日本精神は独裁政治でないのであります。天皇は独裁の元首ではないのであります」と、当時のナチスドイツやイタリアのファシスト党を評価する多くの論調とは異なり、上の者と下の者が互に素直な心を持って意見を交わし合って物事を決めていく日本の精神とは相容れないことを理由に、独裁的な政治の方法を日本に取り入れることを断固否定している(『神道』二四頁)。

(四) 惟神の道の性質

惟神の道とは、一般的には、人の手を加えない、日本固有の神の心のままの道と説明され、国学においては求めるべき理想とされており、宣長が『古事記伝』において、神のはたらきによってつくられたおのずからの道としたものである。

暁烏は、「国家といふものの基礎は理想です。精神です」、また、「日本精神はそのまま惟神の道」と言い、「惟神の道が我国家の中心です」と、惟神の道が日本という国の中心となる精神であると言う(『神道』

八頁)。

暁烏はこの惟神の道について、「それを自覚するものが日本人です。いくら日本の国をつたつて、その惟神の道の自覚がないものなら、それは日本人でない」と言う(『神道』四九頁)。

暁烏は、さらに、「神ながらといふことは神様そのままといふこと」、つまり「惟神」とは神そのまま、神それ自身を示していると理解しており(『神道』一四―一五頁)、その惟神の道とは、「御代御代の天皇の御精神」(『神道』一〇頁)、つまり、歴代の天皇たちの精神があらわれているものであり、「天皇陛下はこの日本の国のこの惟神の道を御身の上に明かにして現して下さる」(『神道』一〇頁)と、今上天皇もまた、惟神の道を体現しているという。そして、天皇は、「日本国に惟神を顕現し、神の御像を現して下さる」(『神道』一〇頁)、つまり日本の神々のすがたをあらわしている存在であると述べている。

また、暁烏は、天皇が国民に出す詔勅は、「陛下が遠く皇祖皇宗の威霊を承けて、常に人民の心になつて人民の福利をお考へになつた真の心からお下しになつた」(『神道』一三頁)ものであり、歴代の天皇の精神を受けて、さらに、それを天皇の中に映し出されている国民の心と照らし合わせて、国民のためを思つて出されるものであるという。

これは、(二)で見た、暁烏の、天皇を「一」、国民を「多」ととらえ、「一二」の天皇の心に「多」の国民の心が映し出されているという考えとも繋がる考えである。

これについて、暁烏は、実際に、惟神の道が「憲法(大日本帝国憲法…筆者注)の前文である『告文』のなかに明らかに陛下が告示になつて」おり、帝国憲法は、「陛下が神明に太子、皇祖皇宗の御前に跪いてその思召を承けさせられ」た、つまり、明治天皇が太子をはじめとした先祖

である歴代天皇の精神を受けて出されたものであるという。そして、そのことも含め、たびたび帝国憲法について言われる、「西洋の憲法を真似た」という批判は間違ひであるとも指摘している(『神道』一二五頁)。

ここから、暁烏は、天皇によつて示される惟神の道とは、固定化したものではなく、柔軟な性質であると考えていることがわかる。そして、天皇については、当時一般に認識されていたような、強権的で神聖不可侵な存在とは考えておらず、周囲の意見や時代性によつて柔軟に変化していく存在であると理解していた。これは、(三)で見た、日本精神は様々なものを取り入れていくものであるという「日本精神の受容性」の考えとも通じるものであると言える。

(五) 惟神の道と太陽

暁烏は、「日本人の一番の理想は太陽です」(『特質』六九頁)と、日本人は太陽を尊重しているといい、このような思想は、『古事記』において神武天皇が東征する際に、太陽を背負う形を取つて海を渡ったことから、「日を尊むといふことは、後の我々のみの理想ではなくて、ずっと上代から既にあつた理想であるといふことがわかる」と、はるか昔から続くものであるという(『特質』七一頁)。

加えて、「天照大神を太陽として崇めるのは我々日本人の理想であります」(『特質』七一―七二頁)と、日本人は太陽と天照を重ねて考えて尊重する心があつたという。

前で見たとように、暁烏は、惟神の道を歴代の天皇の精神があらわれているものであるとしていた。そして、「それを形の上に仰ぐときは太陽であります」(『神道』六六頁)、「太陽は惟神のそのままである。惟神の道といふのは、太陽のやうな道なんである」(『神道』五六頁)ともい

い、惟神の道と天照を接続させている。

そして、暁鳥は、惟神である太陽・天照について、「天照大神の御精神を和魂と申します。また清明心ともいひます」(『神道』五六頁)と、惟神の道と、「和魂」、そして「清明心」を接続させている。「清明心」とは、「清き明き心」ともいい、古代日本人が理想としていたとされる精神で、人に対する素直な心を指す、人との融和において大切になる心であり、暁鳥の「和魂」とも通じる心である。汚れた状態を良しとせず、穢れを祓う精神が含まれている点も特徴である。

惟神の道を太陽と結び付け、その太陽から、天照の心であるという「和魂」、「清明心」をつなげた暁鳥は、さらに、「清く明かな心、それを感じますと、私はいつもお経の言葉を思出すのです。『無量寿経』に「天下和順に、日月清明なり」と、あります」(『神道』五六頁)といい、「天下和順に、日月清明なり」の「和順」は、第一条であらわされている「和」が「この和順の心」にあたり、「その和順の心が日月清明である。清明とは天照大神の清明心であります。……和らぎのある明い心である」(『神道』五六頁)と、天照や「清明心」と結び付けた惟神の道を、『無量寿経』の言葉を用いて仏教まで接続させ、「惟神の道といふことは、仏様とはなれたことでない」(『神道』七二頁)としている。

四、十七条憲法第二条「直毘」

暁鳥は、十七条憲法第二条の「篤く三宝を敬へ」は、「第一条の「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す。」といふ宗を教へる道」(『奉讃』七〇頁)であり、第一条で示された「和」を実現するための方法が示されているといい、以下のように書き下している。

二に曰く。篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。則ち四生之終帰・万国之極宗なり。何の世・何の人は是の法を貴ばざる。人はなほだ悪しきもの少し。能く教ふるをもて順ひぬ。其れ三宝に帰らまらずば、何を以てか枉れるを直うせん。(『奉讃』六九頁)

(一)「直毘霊」

暁鳥は、第二条の、特に「三宝に帰らまらずば、何を以てか枉れるを直うせん」という文言に注目し、「枉れるを直うせん。」とおつしやるこの枉れるとは禍罪です。直うせんとは直毘です」(『奉讃』七二頁)と解釈して、人の心が曲がった状態にあることを「禍罪」、その心が曲がった禍罪の状態を直すことが「直毘」であるとしている。

『古事記伝』においては、「直毘」とは、中国の国風や文化に影響された人々の漢心を直し、真つ直ぐにすることを意味する。

他方、暁鳥は、「直毘」という言葉を、「直毘霊」「直毘の精神」「直毘の魂」などのいくつかの言い方で使用しており、「直毘」という言葉を、宣長が用いていた通りに「直す」運動を意味する言葉として使っている場合もある一方で、同時に、「直毘霊」といふのは、直毘の直は真直ぐな素直なことで、正直の直といふ字です。飾気のない、繕のない、生一本といふ味があります」(『特質』一五五―一五六頁)などと、「直毘」を「真つ直ぐである」という状態を現す言葉として使用している場合もある。

また、暁鳥は、第二条の「三宝に帰らまらずば、何を以てか枉れるを直うせん」を踏み込んで解釈して、「よい教育をすればみんなよくなる」(『奉讃』七二頁)と理解し、その意味でも「直毘」が必要であるとしている。

それから、暁烏は、第一条で示されている「和」を持つ心である「和魂」について、「直毘霊」とも云うて、真直ぐな正しい魂（『奉讃』八五頁）であるという。「直毘霊」とは、『古事記伝』では、漢心を祓い清める直毘の魂を指すが、これを、暁烏は、「古事記」の中心の信念を現はしたものである、日本神代を中心とした思想であるとしており、「和魂」は、そのような真つ直ぐな精神であり、そして、「祓ひ清め、禊した純な心」であるという（『特質』一五六頁）。ここから、「直毘霊」とは、ただ綺麗だけではなく、ついていた穢れを祓い、禊をした綺麗な心であり、そのような、清めた心の状態を理想としていることがわかる。そして、暁烏は、第二条の「人はなほだ悪しきもの少し。能く教ふるをもて順ひぬ」を、「よく教へれば、人はきつと助かるものだ。いくら人に忤うて軌道を逸するやうな者でも、それをよく教へたら素直になる」（『特質』一五一頁）と解釈する。つまり、どれほど心が汚れていたとしても、「きちんと教育をすれば」清めて「直毘霊」の状態になるとができる。暁烏は考えているのであり、誰しもがその資質を有していると考えているのである。

(二)『古事記伝』的観点に基づく「和」の実現

では、暁烏は、第一条で示されている「和」の実現のためには、何が必要と考えているのだろうか。暁烏は、これを『古事記伝』に基づいた視点と、仏教に基づいた視点の両面から説明し、「和」の実現を通して神道と仏教の接続をしている。

暁烏は、「枉つた者が真直ぐになる。穢れた者が清まつてゆく。といふについては、この三宝に頼まねばならん」（『特質』一五二頁）と、仏・法・僧の三宝に帰依していない、何もしていない者を「枉つた者」

「穢れた者」としており、そこから、何もしていない状態を、心が曲がっている、汚れているとしていることがわかる。

暁烏は、第二条の「枉れるを直うせん」から、「この枉つた者が真直ぐになるといふことを読みますと、私は伊邪那岐神の禊のことを思ふのであります」（『特質』一五二頁）と、イザナギが黄泉の国で汚れた身を清めるために、禊をした伝説を想起し、そこからさらに、「日本の宗教思想が、最も簡単に現はれてをるのが、あの祝詞であります。祝詞を読みますと、その中に、「祓ひたまへ清めたまへ。」といふ言葉があります」（『特質』一五三頁）と、「祓えたまえ、清めたまえ」という神道の祝詞には日本の宗教思想が端的に表れているとしている。

暁烏は、祝詞について、「祓ひたまへといふのは、穢れを祓ふのです。罪を祓ふことです。清めたまへもさうです。汚れを清めるのです」（『特質』一五三頁）と、汚れたものを取り払い、綺麗にすることを意味しており、それはイザナギの禊に通じているという。

暁烏は、これを、太子が「三宝を頼むことによつて、枉つた者が真直ぐになるといふことを教へられた」（『特質』一五二頁）と、この直毘を仏・法・僧の三宝への帰依につなげており、さらにイザナギが水で禊を行ったことを、世界中の様々な宗教が水に入って儀式をしていることとつなげ、「聖徳太子様は、この水によつての禊を、仏・法・僧の三宝によつてせよ」（『特質』一五七頁）としていると、三宝への帰依がそのまま禊となると、記紀神話のイザナギの禊を仏教への帰依へと接続させて考えているのである。

(三) 仏教的視点に基づく「和」の実現

暁烏は、そのままの、何もしていない状態を、「枉れるとは禍罪」と

していた。そして、「禍罪は仏教の言葉で云へば地獄」と言うが、これは、「直毘とは浄土です」と、理想の状態を浄土としたことと対応している（『特質』一五八頁）。

暁烏は、理想とする状態にないことを「地獄」とし、『古事記伝』にのつれば、そこから禊をして穢れを落とすべきであると言う。それを室町時代に浄土真宗を再興させた蓮如が『領解文』^{りょうげもん}において述べていた言葉を引いて、「仏教では「難行難修自力の心をふり捨てる。」といひます」（『奉讃』七五頁）と、念仏者が阿弥陀仏の極楽浄土へと往生するために自力の心を捨てることとつなげ、これは、自力の心を捨てるのみでなく、「外からついたものを取除く心」（『特質』一八八頁）であるとしている。

暁烏は、「仏教は、いろんなごてごてしたものをなくす教」であると言ひ、「お寺へ来る者は、伊邪那岐神が禊をせられるやうな気持ちで来るのだと思ふ」と、自力の心を捨て極楽浄土を求める仏教（浄土真宗）の思想と、イザナギが禊によって穢れを落したことをつなげている。このような論理で、「仏・法・僧の三宝を以て禊をせよと仰せられるのです」と、禊の手段として仏・法・僧の三宝への帰依を説いているのである（『特質』七六頁）。

また、浄土真宗の自力を捨てる精神を、「それが直毘の精神であります。法を聴聞するといふことは、何ものも加へるのではなくて、ついたものを放せばよいのです」と、「真つ直ぐにする」という「直毘」の運動と通じるものであるとし、穢れを取るイザナギの禊と、自力を捨てる浄土真宗の教えを重ねた形で理解している。そして、理想とする状態になるために、禊の手段として仏・法・僧の三宝への帰依を説き、「その禊は何によつてするのか。教です」（『特質』一七二頁）と、禊のために仏

教への帰依を教えなければならぬという。

このような考えのうえで、「よい教育をすればみんなよくなる」と、国民の曲がつた心をまっすぐにし、「和」の状態とするために、仏教の三宝への帰依を説いて教育するという目的で、太子は十七条憲法第二条を制定したと暁烏は考えているのである。

おわりに

以上のように、本論考では、暁烏は「和」の考えを中心とした受容的な考えを意識しており、仏教と神道の両者を接続させることによって、両宗教の同時の信仰を実現していたことなど、その思想の独自性を明らかにした。そして、その思想は、天皇主義に基づく排外主義的な思想によって戦時教学を推し進めたとされる、「日本主義者」であったとは一概にまとめがたい思想であった。

暁烏のこの独自の思想は、一九四一年に真宗大谷派の重鎮たちで今後の教学について議論をした、「真宗教学懇談会」でも本人によって披露され、議論をよんでいる。その中で暁烏は強い語気で自身の思想をおしすすめることによって、戦時の大谷派の教学に影響を与えていた。¹⁰

また、暁烏は当時の仏教者の中でも特に仏教の実践に重きを置き、信者と密接に関わっていた点で、特に一般に対し影響が強かった。そのような人物の思想の固有性を明確にすることで、戦時教学の内実とその展開がより明確になっていくのではないだろうか。

戦時教学、ひいては、宗教に限らず、戦争を推し進めたとされる思想について検討する際に、それらは、問題のある思想であるという、現代からの視点を前提として進めてしまうと、その思想そのものの実態が見えなくなるのではないだろうか。戦争へと突き進んでいった当時の思想

を検討し、その原因を説明することは、未来に向けて非常に重要なことではあるが、そのためには、一度現代からの偏見を捨て、純粹にその思想そのものに向き合わなくてはならない。そのようにして、過去の思想の反省を、未来へと生かしていくことができるのではないだろうか。

〈主に扱った参考文献〉

(註に記したものは除く。引用の際には、旧字体を新字体に変更した)

- 暁烏敏『聖徳太子奉讃』北安田パンフレット第二十九、一九三一年
 暁烏敏『日本仏教の特質』北安田パンフレット第三十三、一九三一年
 暁烏敏『神道と仏道』北安田パンフレット第四十三、一九三五年

〈註〉

- 1 末本文美士『日本宗教史』岩波書店、二〇〇六年、二〇九～二一〇頁
- 2 主なものとして、中島岳志『親鸞と日本主義』(新潮社、二〇一七年)、
 ジョアキン・モンテイロ『暁烏敏における海外開教の問題について』(同
 朋大学佛教文化研究所紀要)二〇号、二〇〇一年)など。
- 3 主なものとして、山本伸裕『精神主義は誰の思想か』(法蔵館、二〇一
 年)、山本伸裕『真宗的生命観とその思想的展開——暁烏敏の事例』(『死生
 学研究』一六号、二〇一一年)など。
- 4 『暁烏敏全集』(全二八巻、暁烏敏全集刊行会、一九七五～一九七八年)
- 5 松田章一『第五回金沢大学暁烏記念式・記念講演 暁烏敏の意義』(金
 沢大学附属図書館報)第一五〇号、二〇〇三年、三～四頁)
- 6 暁烏敏『上宮聖徳法王帝説…聖徳皇太子十七条憲法皇太子聖徳奉讃和讃』
 香草舎、一九三六年、四七～五二頁
- 7 「和魂」は、一般的に広く温和・柔和な神霊を指すが、暁烏は天照の神霊
 に限定している。

8 暁烏のこのような考え方は、一七～一八世紀ドイツの哲学者・ライプニッツの提唱した、モノドや予定調和の考えを参考にするに理解しやすい。

9 原文では、「其れ三宝に^な帰りまつらば」となっているが、『聖徳太子奉讃』の他の箇所では、「帰りまつらずば」と言っており、この書き下しは誤記であると考えられるため、「其れ三宝に帰りまつらずば」と改めた。

10 中島岳志、前掲書(二二一～二四〇頁)にてその議論の分析がなされている。

〈謝辞〉

本論文の執筆にあたり、終始多大なご指導をいただいた、日本女子大学人間社会学部文化学科伊藤由希子准教授に感謝の意を表します。